

血中抗ミューラー管ホルモンレベルが高値を示すも 病態が異なった乳用育成牛の2症例

大脇茂雄^{1)†} 内山愛子¹⁾ 一色大志²⁾ 金田利明¹⁾ 渡部 萌¹⁾
関口 洋¹⁾ 渡辺 隆¹⁾ 渡邊謙一³⁾



本文はこちら
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jvma/78/8/78_e110/_article-char/ja

- 1) 北海道農業共済組合オホーツク統括センター佐呂間家畜診療所
(〒093-0507 常呂郡佐呂間町字東142-8)
- 2) 宮崎農業共済組合児湯家畜診療所 (〒889-1406 児湯郡新富町大字新田17938-5)
- 3) 帯広畜産大学基礎獣医学研究部門 (〒080-8555 帯広市稲田町西2線11)

(2024年9月4日受付・2025年5月19日受理・2025年8月26日公開)

要 約

乳牛において卵巣腫大の原因としては卵胞嚢腫や顆粒膜細胞腫があげられる。顆粒膜細胞腫の診断指標としては血中抗ミューラー管ホルモンの高値が有用とされている。今回、顆粒膜細胞腫に特徴的な無発情、乳房の異常発達、直腸検査での片側性卵巣腫大、及び蜂の巣様構造を示す卵巣超音波画像に加えて、血中の抗ミューラー管ホルモンの高値も共通所見として確認された乳用育成牛の2症例に対して、立位臍部切開による卵巣摘出術を行った。摘出された卵巣に対して病理組織学的検索を行ったところ、それぞれ卵胞嚢腫、顆粒膜細胞腫という病理組織学的診断であった。今回の比較により抗ミューラー管ホルモンの高値では顆粒膜細胞腫を必ずしも確定できないことが示唆された。

——キーワード：抗ミューラー管ホルモン，卵胞嚢腫，顆粒膜細胞腫，卵巣摘出術。

----- 日獣会誌 78, e110～e114 (2025)